

## フタの解剖

## SS生物ユニット特集

### 解剖する姿は医学研修生のように！

11月10日(土)午後、SS生物ユニットの「フタの解剖」が本校生物実験室で昨年度に引き続き実施されました。参加した生徒は34名。相変わらずの人気ぶりです。今年の特徴は男子が多くなったこと、フランスからの留学生の参加もあったこと。

	男子	女子	計
3年生	2	0	2
2年生	4	10	14
1年生	10	8	18

指導にあたったのは、平田先生を中心とする本校生物科の先生方です。内容は第一部が講義と「フタの心臓の解剖」、第二部が「フタの脳の解剖」です。解剖は3～7人一組で実施しています。全員実験用ゴム手袋で、使い捨て白衣を着ている生徒もいて、ピンセットやメスを扱う姿も実に様になっています。

#### 心臓を外と内から観る

最初は、心臓の解剖。目的は心臓の構造を知り、血液を送り出す仕組みを学ぶこと。

触って直接見る実際の心臓は、教科書の図では分からない質感を感じ、誰も再認識させられたはず。心室の壁は厚く、頭で理解していた



だけの房室弁を見つけると、新しい発見をしたような気になります。冠状動脈は血液が流れていないのでピンときませんが、薄肌色っぽくて心筋に張り付いています。生徒達は、先生の説明に従い、各部位を探し当て名称を書いた旗を立ててゆきます。ここが一番の関門。ちょうど医学部の学生が勉強している専門書を見ているような感じです。

張付いています。生徒達は、先生の説明に従い、各部位を探し当て名称を書いた旗を立ててゆきます。ここが一番の関門。ちょうど医学部の学生が勉強している専門書を見ているような感じです。

#### 動脈の中はツルツルできれい

実験途中の生徒にインタビューしてみました。

「心臓は複雑、細かい。」「これが自分の中に入っていると思うと不思議。」「動脈がきれいで、今まで血が流れていたとは思えない。」「思っていたより丈夫な作り。」「大動脈の厚さが厚みがあって驚いた。」「動脈の中がすごくツルツル。」「これを見ると、生き物は簡単に肉の塊になるのだなと思った、ちょっと前までは生きていたのに。」

#### 脳は複雑で100gくらい

次に脳の解剖。(不快な気分になる人は、この段落は読み飛ばして下さい。)脳は硬い頭蓋骨で覆われています。厚いところで2cm位あります。この頭蓋骨を頭頂部から開かないことには脳は取れません。各グループとも、ノコギリ、タガネ、木槌で必死になって頭蓋骨を開く作業をしています。その際、注意しな



ければならないことは中の脳を傷つけないこと。相当固いので、どのグループも苦労しています。15分以上はかかったような気がします。力を振り絞り、やっとなつに開くこと

ができた時は、どのグループからも歓声が上がりました。

脳の重さを計てみると、95g、101g…。手に拵って、それぞれ記録写真を撮ります。そして、頂部から二つに切開して内部の観察。平田先生によれば、大脳のしわ(大脳溝)は種が同じであれば同じで個体差がないそうです。嗅覚神経は直近で大脳に繋がっていて、脊椎動物の特徴のようです。

#### 参加して良かった

参加した生徒に感想を聞いてみると、口々に良かったという答が返ってきました。何故参加したのか尋ねてみると、「解剖に興味があったから」とか「解剖をやったことが無かったから」というような割と単純な動機で気兼ねなく応募しているということが分かりました。解剖というと、生理的に嫌悪感を示す人もいるのも当然です。しかし、参加した生徒たちは4時間もの長時間、生き生きと解剖に取り組んでおり、その光景はとても印象的でした。

留学生によれば、フランスでも生物の授業で同じような解剖実験をしたそうです。彼女が自分で描いた心臓の概略図は大きくきれいでしっかりしており、それに各部の注釈を入れたノートは、授業を受ける時の姿勢として私達も学ぶべきです。

(文責: 渡邊文彌)

